

【論文】

ローマ字教育とローマ字入力について考える

—二者の間の接点に注目して—

The Point of contact between Roman alphabet education and Roman letter input

長澤直子

NAGASAWA, Naoko

キーワード: JIS キーボード; ローマ字入力; ローマ字教育; タッチタイピング

Received: 2011.11. 1 Accepted: 2012. 2. 5

1. はじめに

コンピュータ、とりわけパーソナルコンピュータ（以下、パソコン）における文字入力
は、現状、JIS キーボードによるローマ字入力という方法をとるユーザーが多いのが実情で
ある。今日では、携帯電話やスマートフォン、あるいはタブレット PC などにおいて、JIS
キーボードを使用しない入力方法（図1、図2）も使われてきているが、スマートフォンや
タブレット PC に Bluetooth で接続するキーボードが別売されるなど、操作の利便性や入力
速度などを考えると、JIS キーボードの優位性はまだしばらく続きそうだ。



図 1 携帯電話のキーボード

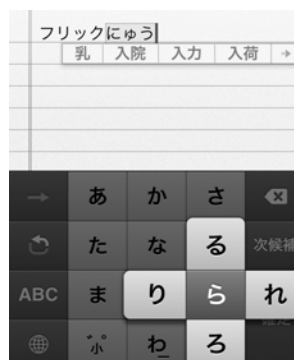


図 2 スマートフォンによるフリック入力

一方、若者は、携帯電話やスマートフォンの普及により、幼少時より端末による文字入
力に親しみながら育つ環境がすでに出来あがっているが、それらの端末による日本語入力
は、キーの連打やフリック入力（図2）によるものであり、いずれも「かな入力」である。
よほどパソコンに親しめる環境がない限り、JIS キーボードでのローマ字入力をする機会は
少ないものと考えられる。

そのような中、学生が JIS キーボードでローマ字入力によるタッチタイピングをしている
様子を見ると、無駄に打鍵数の多くなる綴りを選択していたり、わざわざ動かしにくい指
を使った綴りを選択していたりすることに気が付く。

タッチタイピングやローマ字入力に関する近年の研究では、タイピング練習ソフトを用いた練習成果を調査されたもの¹⁾や、タイピング時の指使いと入力文字数の関係を調査されたもの²⁾などが存在するが、いずれもローマ字入力時の綴り選択に関する論考ではない。

本稿においては、教育上の問題としてローマ字教育とローマ字入力の接点に注目し、学生がローマ字入力時にどのような綴りを選択しているのかということを、調査を通して明らかにするとともに、なぜそれらの綴りを選択するのかを考察する。

2. ローマ字とローマ字入力

2.1. 学校教育におけるローマ字教育

ローマ字には訓令式とヘボン式が存在するが、2011年現在、小学校国語科の教科書で扱われているのは訓令式がメインになっており、ヘボン式表記も併記された形になっている³⁾⁴⁾ (図3)。中学校の英語の時間にヘボン式を学習するが⁵⁾、学校教育におけるローマ字に関する学習は、この時点で最後となる。

一方、パソコンのキーボードにおけるローマ字入力は、学校で学習するローマ字以外にも綴りが存在する。たとえば、小学校国語科の教科書では、拗音の表記が「きゃきゅきょ」「しゃしゅしょ」「ちゃちゅちょ」等、3音しか表記されていないが、ローマ字入力用の綴りにおいては、「きゃきいきゅきえきょ」「しゃしいしゅしえしょ」「ちゃちいちゅちえちょ」など、5音分用意されている。また、小学校国語科の教科書には記載されない「てやていててえててよ」などの音も存在する。

ローマ字入力用のローマ字の綴りに関しては、高等学校情報科の教科書において、巻末資料の形でローマ字対応表が用意されている⁶⁾。筆者が確認した限りでは、この資料においては5音すべてが記載されているものが多いが、一部では3音のものもあり、また、タッチタイピングの指使いに関して言及されているものは一社のみであった。しかし、あくまでもそれは高等学校の教科書であり、しかも巻末付録という形なので、授業の中でどこまで踏み込まれて教えられているのかは不透明である。

また、中学校技術科の教科書においても、一部の出版社のものについては、巻末資料という形でローマ字対応表が掲載されている⁷⁾。こちらも、掲載されている場合は5

ローマ字

大文字	ア段↓		イ段↓					
	A	I	U	E	O			
ア行→	あ a	い i	う u	え e	お o			
カ行→	K ka	き ki	く ku	け ke	こ ko	きゃ kya	きゅ kyu	きょ kyo
	S sa	し si [shi]	す su	せ se	そ so	しゃ sha [sha]	しゅ syu [shu]	しょ syo [sho]
	T ta	ち ti [chi]	つ tu [tsu]	て te	と to	ちゃ cha [cha]	ちゅ tyu [chu]	ちょ tyo [cho]
	N na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no	nya	nyu	nyo
	H ha	ひ hi	ふ hu [fu]	へ he	ほ ho	hya	hyu	hyo
	M ma	み mi	む mu	め me	も mo	mya	myu	myo
	Y ya	(い) (i)	ゆ yu	(え) (e)	よ yo			
	R ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro	rya	ryu	ryo
	W wa	(い) (i)	(う) (u)	(え) (e)	(を) (o)			
	n							
	G ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go	gya	gyu	gyo
	Z za	じ ji [ji]	ず zu	ぜ ze	ぞ zo	zya [ja]	zyu [ju]	zyo [jo]
	D da	ぢ (zi) [ji]	づ (zu)	で de	ど do	ぢゃ (zya) [ja]	ぢゅ (zyu) [ju]	ぢょ (zyo) [jo]
	B ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo	bya	byu	byo
	P pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po	pya	pyu	pyo

[] 中の書き方も使うことができる。() は、重ねて出ているもの。

図3 小学校国語科教科書におけるローマ字表
(光村図書 国語 四 上「かがやき」より)

音すべてが掲載されているが、平成 17（2005）年検定済のものには掲載されていなかったのが、平成 23（2011）年検定済のものから掲載され始めたものも存在する。

2.2. ローマ字学習に関する学生への調査結果

2011 年 4 月に、短期大学入学者 46 名を対象とした調査⁸⁾を行った結果、高校時代にローマ字に関する授業があったと答えた者は全体の 37.0%にあたる 17 名であった（図 4）。残りの 63.0%にあたる 29 名に関しては、授業で扱われていなかったことが分かる。つまり、半数以上が、高校においてローマ字に関する学習をしていないということであった。

加えて、現在自分が行っているローマ字入力の綴りは、どの時期に学習した知識によるものかを尋ねたところ、小学校が 26 名（56.5%）、中学校が 19 名（41.3%）、その他が 1 名（2.2%）という結果であった（図 5）。ほぼ、小中学校での学習が基になっていることがわかる。

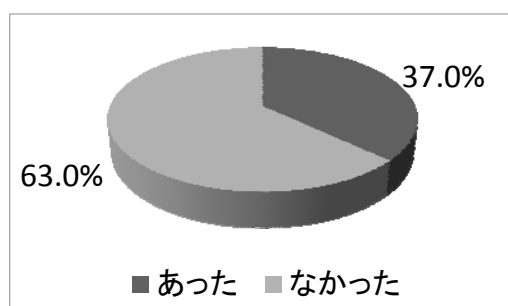


図 4 高校時代にローマ字の学習があったか

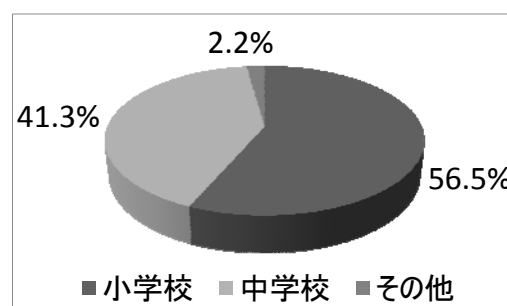


図 5 ローマ字入力のための綴りの知識を学んだ時期

2.3. 両者の結果より

この両者の結果より、ローマ字入力の綴りは、ほとんどが小学校国語科で学ぶ訓令式中心のローマ字、および中学校英語科で学ぶヘボン式ローマ字の学習が基礎になっていることが分かる。その結果、拗音における一部の音に関する綴りの知識が欠落している可能性が高い。

3. JIS キーボードにおけるタッチタイピング

3.1. タッチタイピングとは

ここで、タッチタイピングについて確認しておく。

タッチタイピングとは、キーボードのタイピングを、手元を見ることなく行う方法である。JIS キーボードの場合、おおよそ図 6 のような指分担が標準的だとされている。比較的動きやすいとされている人差し指は、分担するキーが多めになっていることと、親指も含めた 10 本指をフルに活用することが特徴である。普段は、下から 2 段目のホームポジション（図 6 の太枠線部分）に 8 本の指を載せ、必要に応じて周囲のキーへ指を運んで、打鍵後に指を戻す。つまり、ホームポジションのキーは指を動かすことなくそのままタイプできるため、確実かつ負担なく打鍵することが可能になる。



図 6 タッチタイピングにおける指分担

3.2. タッチタイピングのニーズと教育現場での実情

タッチタイピングは、義務教育においてカリキュラムに組み入れられていない。高等学校における「情報科」創設後最初の卒業生が大学に入学した 2006 年時点で行われた調査によると、高等学校の情報科において、タッチタイピングを学んだという者が 14.3%程度であったという報告がある一方で、大学に入ってから学びたいこととしてタッチタイピングを挙げた者が 54%いたという⁹⁾。半数以上がその必要性を感じている一方、大学に入るまでその技能を学べなかったということは、自己流でタイピングをしてきたか、手元を見ながらタイピングをしてきたかの、どちらかであったということになる。

3.3. JIS キーボードによる日本語入力の難点

JIS キーボードは、わが国のパソコンにおいて最も数多く使われている。しかし、JIS キーボードによる日本語入力は、そのキー配列から、決して日本語の高速入力には向いていないといわれている。特にローマ字入力でタッチタイピングをする場合、比較的動きにくい小指や薬指に母音の「A」や「O」が割り当てられるなど、日本語入力にとっては使い勝手のいいものであるとは言い難い。

3.4. 少しでも負担を減らすために

筆者の場合、JIS キーボードへの最初の接点が英文タイプライターであったことから、先にアルファベットの位置が手に馴染んでおり、その状況下において頭の中でローマ字を組み立てることで、容易にローマ字入力でのタッチタイピングへと入っていくことができた。その際に考えたことは、できるだけ負担を少なくするための工夫であった。例えば、次のようなことである。

- できるだけ、ホームポジションのキーを使う
- できるだけ、人差し指や中指などの動かしやすい指のキーを使う
- できるだけ、打鍵数が少なくて済む綴りを採用する
- 必要な綴りは、できるだけ覚える

しかし、学生の場合は、そもそもタッチタイピングが習得できていないため、その練習時にアルファベットの位置を手に馴染ませる作業に必死になるあまり、綴りに関する配慮

や負担の軽減まで考えが及んでいない可能性がある。

4. ローマ字入力の綴り調査

ローマ字入力をする際に、どのような綴りを採用しているかということについて、2011年4月および7月に、短期大学の学生46名を対象とした調査を行った⁸⁾。

まず、4月の入学直後に一度調査を行った。その後、前期授業期間に、小学校国語科の教科書で扱われていない拗音も含めたローマ字入力のためのローマ字対応表を渡し、タッチタイピング習得用ドリルにおける実習にてローマ字対応表にあるすべての音を網羅した練習を行った。そして、7月最終授業日に再度調査を行うことで、4月時点と7月時点での間に綴りの差異が認められるかどうかを確認した。

4.1. 調査方法

Webの画面上にフォームを設置し、短文を4つ記載して、その文章をローマ字でどう表現するかを、アルファベットで入力して送信してもらうという方法を取った。短文4つは、拗音や促音等の綴りも含めて確認できる、次の内容である。

- 踏切では一旦停止して、歩行者の邪魔にならないよう充分注意すること。
- 地域の住民たちによる手作り作品が、通路に展示されている。
- 東京ドームには、エキサイトシートというフィールド席がある。
- 東京ディズニーランドのファンティリュージュンは、2001年に終了した。

これらの文章を用いて、綴りの選択を確認した。

4.2. 単音に関する調査

単音に関しては、「ふ」「じ」「づ」の3音について確認した。

「ふ」「じ」については、訓令式の綴りを採用しているか、ヘボン式の綴りを採用しているかに着目した。ヘボン式の方が、タッチタイピングの際に合理的だからである。

4.2.1. 「ふ」の場合

「ふ」は「hu」でも「fu」でも表現できるが、タッチタイピングで入力すると、右手人差し指でタイプする「h」を使うよりも、左手人差し指ホームポジションの「f」と右手人差し指の「u」を組み合わせる方が合理的である。

これに関する調査結果は、表1のとおりである。数字は、入学時および前期終了時において、それぞれの綴りを選択した人数を表す。

表1 「ふ」の場合

前期終了時 \ 入学時	入学時	
	fu	hu
fu	11	9
hu	3	23

短大入学の時点では、32名（69.6%）が「hu」を採用していたが、前期授業で「fu」の利便性に触れた結果、9名（19.5%）が打ち方を変更している。一方、入学時に「fu」とタイプしていたにもかかわらず、前期授業終了時に「hu」になった者も3名（6.5%）存在するため、一概に便利さを理解して変更した者ばかりではない。入学時に「hu」とタイプしていて、前期終了時もそのまま「hu」とタイプした者は、23名（50.0%）いる。

4.2.2. 「じ」の場合

「じ」は「ji」でも「zi」でも表現できるが、タッチタイピングで入力すると、左手小指でタイプする「z」を使うよりも、右手人差し指ホームポジションの「j」と「i」を組み合わせる方が合理的である。

これに関する調査結果は、表2のとおりである。

表2 「じ」の場合

前期終了時 \ 入学時	入学時	ji	zi	gi (誤り)
	前期終了時	ji	zi	gi (誤り)
ji		22	1	1
zi		2	20	

「ふ」の時と同じように、「じ」という音を表現するにあたって「ji」という綴りの利便性に触れたわけだが、左手小指を使う「zi」から「ji」に変更した者はわずか1名（2.2%）という結果であった。「zi」のまま変更しなかった者は20名（43.5%）であった。

4.2.3. 「づ」の場合

「づ」は、訓令式では「zu」と表現するが、パソコンでローマ字入力をする際に「zu」と入力すると「ず」になるため、ローマ字入力特有の表記方法として「du」が用意されている。そのことを知っているか否かで、入力内容が変わってくる。

これに関する調査結果は、表3のとおりである。

表3 「づ」の場合

前期終了時 \ 入学時	入学時	du	zu
	前期終了時	du	zu
du		19	7
zu			20

根本的に、27名（58.7%）が「du」という特別な綴りを認識していなかったことが分かる。その後、「du」という綴りに関して学習したにも関わらず、「zu」を「du」に直せた者は27名中わずか7名であり、20名（43.5%）は「zu」のまま直すことができなかった。

4.3. 促音に関する調査結果

促音に関しては、「っ」の綴り方法について確認した。

4.3.1. 「っ」の場合

「っ」は、次の子音を重ねて入力することで表現できるようになっている。例えば、学校（がっこう）であれば「gakkou」、河童（かっぱ）であれば「kappa」となる。

今回は「一旦」という単語を用いたため、重ねる子音は「t」となり、綴りは「ittan」が標準的である。

これに関する調査結果は、表4のとおりである。

表4 「っ」の場合

前期終了時 \ 入学時	入学時		
	t	ltu	xtu
t	42	1	2
xtu			1

これに関しては、42名（91.3%）が最初から子音を重ねる入力方法を採用していたが、4名（8.7%）が「xtu」や「ltu」といった、「っ」を単独で入力するやり方選んでいた。「一旦」であれば「ixtutann」や「iltutann」となり、打鍵数が8となる。「ittan」であれば打鍵数が5で済むため、こちらを選んだ方が合理的である。しかし、前期授業時にそのことに触れたにも関わらず、「xtu」のまま変化がなかった者が1名（2.2%）いた。

4.4. 拗音に関する調査結果

拗音に関しては、「じゃ」「じゅ」「じょ」「ふぁ」「ふい」「てい」「でい」の7音について確認した。このうち、「じゃ」「じゅ」「じょ」「ふぁ」は小学校の国語科で学ぶ綴り、「ふい」「てい」「でい」は小学校の国語科では触れない綴りである。

4.4.1. 「じゃ」の場合

「じゃ」は「ja」「zya」「jya」のいずれかで表現できるが、タッチタイピングで入力すると、左手小指でタイプする「z」を使うよりも、右手人差し指ホームポジションの「j」を使う綴りを選択した方が合理的である。また、「y」を挟む「jya」よりも「ja」の方が、打鍵数が少ないばかりか、2つともホームポジションで打鍵できるため、より合理的である。

これに関する調査結果は、表5のとおりである。

表5 「じゃ」の場合

前期終了時 \ 入学時	入学時					
	ja	jya	zya	jixya	zixya	zha (誤り)
ja	6	1	1	1		
jya	1	16	2			
zya	1		15		1	1

「じゃ」という音を表現するにあたって「ja」という綴りの利便性に触れたが、左手小指を使う「zya」から「ja」に変更した者はわずか1名（2.2%）という結果であった。同じく、

「zya」から「jya」への変更が2名(4.4%)、合わせても3名(6.5%)という少なさである。「zya」のまま変更しなかった者は15名(32.6%)であった。

ただし、「jixya」を使っていた者は「ja」に、「zixya」を使っていた者は「zya」に、それぞれ変更されている。打鍵数を少なくしようという心掛けの表れであろうが、最初の音をそれぞれ採用しつつの変更であるところに注目しておきたい。

4.4.2. 「じゅ」の場合

「じゅ」は「ju」「jyu」「zyu」のいずれかで表現できるが、「じゃ」と同様に、左手小指でタイプする「z」を使うよりも、右手人差し指ホームポジションの「j」を使う綴りを選択した方が合理的である。また、「y」を挟む「jyu」よりも「ju」の方が合理的である。

これに関する調査結果は、表6のとおりである。

表6 「じゅ」の場合

入学時 前期終了時	ju	jyu	zyu	jixyu	zixyu	jou (誤り)
ju	5	1		1		1
jyu		16	1			
zyu			20		1	

「じゃ」の時と同じく、「じゅ」という音を表現するにあたって「ju」という綴りの利便性に触れたが、左手小指を使う「zyu」から「ju」に変更した者は0名であった。同じく、「zyu」から「jyu」への変更が1名という少なさである。「jyu」のまま変更しなかった者は16名(34.8%)、「zyu」のまま変更しなかった者は20名(43.5%)であった。

ただし、「jixyu」を使っていた者は「ju」に、「zixyu」を使っていた者は「zyu」に、それぞれ変更されている。

なお、「じょ」に関しても同様に調査したが、「じゃ」「じゅ」と大差のない傾向であった。ここでは、紙面の都合もあり、結果の掲載は省略する。

4.4.3. 「ふぁ」の場合

「ふぁ」は「fa」で表現できるが、「f」を使う綴りはヘボン式となるため、訓令式の綴りが頭に入っている者は「hula」「huxa」などの綴りを選択している可能性がある。

これに関する調査結果は、表7のとおりである。

最も効率のいい「fa」を選択していた者は、入学時点で29名(63.0%)、前期終了時点で34名(79.0%)であった。ただし、入学時点で「fa」とタイプできていたにもかかわらず、前期終了時に誤った綴りをタイプした者が3名いた。また、「fula」「hula」などの面倒な綴りを選択していた者は、ほとんどが「fa」と表現できるようになったが、1名のみ「fla」という誤った綴りを覚えていた。また、この音については、これまで見てきた他の音と比較して、誤った綴りの種類が多いことに注目しておきたい。ヘボン式の綴りが頭に入っていないことから、創作されたものが多かったのであろう。

表 7 「ふぁ」の場合

入学時		fa	fula	fuxa	hula	huxa	fya	ha	hua	hxa	hya
前期終了時		(誤り)									
fa		26	2	1	1	1		1		1	1
fula											
fuxa				1							
hula					3						
huxa						1					
fya	(誤り)	1					1				
ha		1									
hya									1		
faxa							1				
fla				1							
fxa		1									

4.4.4. 「ふい」の場合

「ふい」は「fi」で表現できるが、「ふぁ」と同じく「f」を使う綴りはヘボン式となるため、訓令式の綴りが頭に入っている者は「huli」「huxi」などの綴りを選択している可能性がある。また、小学校国語科、中学校英語科のどちらの教科書にも出てこない音であることから、そもそもの知識が欠落している恐れのある音である。

これに関する調査結果は、表 8 のとおりである。

表 8 「ふい」の場合

入学時		fi	fyi	fuli	fuxi	huli	huxi	fl	fli	fxyi	hhi	hui	hyi
前期終了時		(誤り)											
fi		18		2	3	2	3	1		1		1	1
fyi		1	1						1		1		
fuxi					1								
huli						3							
huxi							1						
fli	(誤り)						1						
fhi		1											
hi							1						
hyi			1									1	

誤りが多く、誤りの種類が多種に渡っている点は、「ふぁ」の傾向と似ている。また、前期終了時に「fi」を選択できるようになった者が 70%近くに上ったことも、「ふぁ」の傾向と似ている。つまり、「ふぁ」を基にすれば、「ふい」の綴りを導き出すことができるため、

小・中学校で触れていないとはいえ、この音についてはある程度容易に対応できる要素があったものと考えられる。

4.4.5. 「てい」の場合

「ふい」と同じ、小・中学校で触れない類の音である。ローマ字入力では「thi」と表現するが、知識が欠落している可能性が高い。

これに関する調査結果は、次のとおりである。

表 9 「てい」の場合

入学時		thi	teli	texi	de	tE	tei	ti	tili	tye	tyi	xi
前期終了時		(誤り)										
thi		8	1	3		1					1	
teli			10							1		
texi				5								
ryi	(誤り)			1								
ryu			1									
ti				1	1			2				
twi								1				
txi								1				1
tyi			1	1			1	1	1		2	

「てい」についても、傾向としては「ふい」に似ているが、「thi」という綴りで入力できた者が、8名(17.4%)しかいなかったことから、8割以上の者がこの音に対する正しい綴りを認識していなかったことが分かる。代替案として「teli」を選択した者が多かったが(13名・28.3%)「teli」から「thi」に直した者はわずか1名で、「teli」のまま変更しなかった者が13名中10名おり、積極的に綴りを覚えて直していこうという意思が見られない。

なお、「でい」についても同様に調査したが、「dhi」という綴りで正しく入力できたものが6名(13.0%)「deli」が11名(23.9%)など、ほぼ同様の傾向であった。ここでは、紙面の都合もあり、結果の掲載は省略する。

5. 考察

5.1. 調査の結果から

まず、ローマ字の綴りを、小・中学校での学習を基に選択しているということから、一部の音に対する知識が欠落しているのではないかという仮説に対しては、8割以上の者が欠落しているという結果であった。拗音が3音ずつしか学習されていないことによる知識の欠落であると考えられる。

しかし、欠落している音の中でも、「てい」や「でい」などは、「ティッシュ」や「ディ

スプレイ」など、外来語として日常生活でよく使われる音が少なくない。それに対して、彼らは、綴りを知らないことを、母音の手前に「l」や「x」を付けることによって小文字にすることで補っており、正しい綴りを知った後も、その方法から変更することを積極的にしようとしていないことが明らかになった。

また、タッチタイピングにおいて動かしにくい指を使った綴りから、ホームポジションを使った綴りに変更しようという動きも、積極的には見られなかった。

5.2. 負担を減らす綴りを選択しない理由

調査の結果、当初選択していた綴りから、学習後に綴りを積極的に変更しようとする者が多くないということが明らかになったわけだが、ローマ字に関して改めて学習し、加えてタッチタイピングも学習した後、従来自分が選択していた綴りよりも楽にタイプできる綴りがあることを知ったにも関わらず、なぜ、わざわざ指に負担のかかる、あるいは動かしにくい指を用いた綴りで入力しようとするのだろうか。

ひとつは、そもそもタッチタイピングにおける正しい指分担を知らなかったということが挙げられる。正しい指分担では両手 10 本の指のうち 9 本までを使って分担することになるが、タッチタイピングを学習する以前でのタイピングにおいて、使いにくい薬指や小指を使わずにやり過ごしていた可能性がある。わざわざ、使いにくい指を選択していたのではなく、指使いのことを考慮せず、ただ単純にそれらの綴りを選択していたということになる。

ならば、正しい指分担を知った今、綴りを改めて覚え直して負担を減らそうとは考えないのだろうか。

これに対しては、「一度覚えたものをわざわざ覚え直すことが面倒だ」という発想があることが考えられる。ローマ字入力をするための綴りをそれなりに覚えて、大して不自由なく使っている現状において、わざわざ新しく何かを改善しなくても、現状維持で十分だという考え方である。小・中学校時代に学んだローマ字の知識が基になっているということは、その知識自体はすでに長期記憶となっているため、「思い出す」というよりは「無意識に出てくる」という感覚になっていることもあるだろう。

これには、筆者にも覚えがある。筆者の場合、ローマ字は訓令式よりもヘボン式に馴染みがあったため、例えば「し」であれば「shi」、「つ」であれば「tsu」と入力して表現していた。ある時、入力するための速度を上げようと考えて、余計な打鍵を減らそうと試みたのだが、「shi」の「h」を 1 文字取るだけでも、相当な努力を要した。つまり、相当意識して変えていかないと、一度身についたものがそうそう簡単に変わるものではないということである。

6. ローマ字教育とローマ字入力に接点はあるのか

小学校や中学校で学ぶローマ字の知識があれば、ローマ字入力は快適にできるようになると考えられているのだとしたら、少し考えを改めなければならないのではないだろうか。ローマ字教育とローマ字入力の間には、意外なほどに接点が多い。これまで見てきた

とおり、拗音が3音ではなく5音必要であることはもちろんのこと、「づ」や「を」などの特殊な綴り、あるいはJISキーボードをタッチタイピングすることを考えて負担のない綴り選びをすることなど、快適に利用することができるようになるために、配慮しなければならないことが数多く存在する。

一方、拗音が3音ではなく5音すべてが表記されている教科書は、ごく一部にしか存在しない。少なくとも、2011年現在の小中学生は、ほとんどが5音のローマ字対応表を目にすることなく学校生活を送っている。

打鍵数でみると、和文と英文の入力におけるキー・ストローク数を比較した研究において、日本語入力は、ストローク数では英文と遜色ないという論考があるが¹⁰⁾、これはローマ字入力において最少のストローク数を採用することが前提となっている。実際の運用において、最少の打鍵数ではないとなると、この結果も揺らいでしまうことになる。

今後も、学校教育においてJISキーボードによるローマ字入力を採用し続けるのであれば、拗音を5音で表したローマ字対応表を小学校の段階で導入するべきであろうし、同時にタッチタイピングの基本も手ほどきしておくことが、将来のことを考えるとより良い選択なのではないだろうか。

註

- 1) 篠政行「情報教育としてのコンピュータリテラシーとタッチタイピング」『駒沢女子短期大学研究紀要』第39号 2006 pp.67-74
- 2) 井山慶信・大久保比呂美・金谷孝之「情報教育環境の整備に伴う情報スキルの現状把握—入力速度とタッチタイピングに着目して」『広島国際大学医療経営学論叢』第4巻 2011 pp. 49-55
- 3) 小学校国語科の教科書に関しては、次の各社のものを確認した。(いずれも平成23(2011)年用)
光村図書『国語 三 上 わかば』 学校図書『みんなと学ぶ小学校 国語 三年 上』
東京書籍『新しい国語 三 上』 教育出版『ひろがる言葉 小学国語 3 上』
三省堂『小学生の国語 三年』
- 4) 昭和二十九年十二月九日、内閣告示第一号「ローマ字のつづり方」に準じたものとなっている。
「ローマ字のつづり方：文部科学省」http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19541209001/k19541209001.html (2011.10.20 存在確認)
- 5) 中学校英語科の教科書に関しては、次の各社のものを確認した。(いずれも平成23(2011)年検定済、平成24(2012)年用)
教育出版『ONE WORLD ENGLISH COURSE 1』 東京書籍『NEW HORIZON English Course 1』
三省堂『NEW CROWN ENGLISH SERIES 1』 学校図書『TOTAL ENGLISH NEW EDITION 1』
開隆堂『Sunshine ENGLISH COURSE 1』
- 6) 高等学校情報科の教科書に関しては、次の各社のものを確認した。(いずれも平成18(2006)年検定済)
東京書籍『情報 A』 日本文教出版『新・情報 A』 第一学習社『情報 A』『情報 C』
啓林館『情報 A』 数研出版『情報 C』 実教出版『情報 A』『情報 C』
- 7) 中学校技術科の教科書に関しては、次の各社のものを確認した。(いずれも平成23(2011)年検定済、平成24(2012)年用)
教育図書『技術・家庭 技術分野』 開隆堂『技術・家庭 技術分野』
東京書籍『新しい技術・家庭 技術分野』
- 8) 2011年4月および7月に、大阪成蹊短期大学(大阪市)の学生46名を対象に調査を実施した。
- 9) CIEC 小中高部会「検証、教科「情報」高等学校教科「情報」の履修状況調査の集計結果と分析」『コンピュータ&エデュケーション』Vol.21 2006 pp.10-16
- 10) 八原俊彦・西の平幸司・河合秀夫「和文・英文入力に対するキー・ストローク数の比較」『情報処理学会論文誌』第40号6巻 1999 pp.2838-2841